# Zr基金属ガラスのナノ準結晶の解析

京都大学 院生 柏谷悠介 福本武文 同院 奥田浩司 落合 庄治郎 東北大学学際センター 才田淳治

#### 課題:

1. Zr基合金のナノ準結晶晶出において、ZrPt系とZrPd系の比較をす るため、ZrPt系の特徴を定量的に評価する必要がある。(コントラストの 問題で、これまでZrPd系ほど詳細な調査がされていない)。

2. TEM/EDXで組成差が検出限界以下であるZrPtのナノ準結晶晶出 試料で何故明瞭な小角散乱が認められるのか。

3. ZrPtの非晶質母相とナノ準結晶の構造(組成、密度差)の特徴は?

## 異常小角散乱でのコントラストの原因は?



### **Results : Binary ZrPt alloys**

- · Heat Treatments :
- \* as-melt spun,
  \* annealed at 800 K for 0.9 - 3.6 ks
- => QC Precipitation from glass state
- ⇒ Metastable phase formation at long annealing (3.6 ks) with Bragg (red circle)







During annealing at 800 K, both the radius of nano-QC and the integrated intensity increased.



Gyration radius & Integrated Intensity during annealing





### 異常分散効果を使った解析



## ほとんど組成差のないナノ準結晶の 小角散乱の原因?

- $A(q) = \int \Delta f(r, E) \exp(iqr) dr$
- $\Delta f(r, E) = \Delta \left\{ f_{Pt} c(r) + f_{Zr} \left( 1 c(r) \right) \right\} n(r)$

原子散乱因子密度の平均値からのず れを、密度の揺らぎと組成の揺らぎの 和で表現する。(微小変化として近似)

$$\frac{\Delta f}{c_0 n_0} \cong (f_{P_l} - f_{Z_r}) \cdot \Delta \widetilde{c}(r) + \frac{f}{c_0} \Delta \widetilde{n}(r)$$

規格化された組成揺らぎ +規格化された密度揺らぎ

→ それぞれの揺らぎの構造が一致しないのであれば Barthia-Thorntonの式となる。

### 異常分散効果から散乱コントラストの原因を探る

 $I(q) = \alpha^2 S_{cc}(q) + 2\alpha\beta S_{cn}(q) + \beta^2 S_{nn}(q)$ 

 $I(q,E) = \{\alpha(E)\Delta \tilde{c} + \beta(E)\Delta \tilde{n}\}^2 \Phi^2(qR)$  Two-Phase  $\exists J$ 

 $\alpha(E) = c_0 n_0 (f_{P_t}(E) - f_{Z_r}(E))$  $\beta(E) = n_0 \overline{f}(E)$ 

#### 吸収端近傍と離れた場所での小角散乱強度比は

$$R = \frac{I_{far}(q)}{I_{near}(q)} = \frac{\{\alpha(E_{far})\Delta\tilde{c} + \beta(E_{far})\Delta\tilde{n}\}^2}{\{\alpha(E_{near})\Delta\tilde{c} + \beta(E_{near})\Delta\tilde{n}\}^2}$$





#### まとめ

- Zr-Pt合金のアモルファスからの準結晶晶出初期の構造変化を小角散乱法により評価した。
- 電子顕微鏡の評価ではアモルファスと準結晶の 間には組成差が認められないにもかかわらず、 熱処理に伴い明瞭な小角散乱の増加が認めら れた。
- 異常小角散乱強度比の解析により、観測された 小角散乱に対するナノ準結晶の寄与分について は、組成と密度の揺らぎがお互いに散乱長密度 をエンハンスする方向で一定の比にカップリング していることが明らかとなった。